

# 75年目の沖縄に聞く

—集まらない、今だからこそ—

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、平和に関する研究を継続して行ってきました。2015年以降、沖縄での調査を重ね、映画『ドキュメンタリー沖縄戦—知られざる悲しみの記憶—』の製作に着手。2019年12月には映画が完成し、皆さんの関係者・協力者の方々に囲まれながら、沖縄で完成披露上映会が開催されました。そして、各教区においても平和学習のための映画上映会が始まろうとしていた矢先、新型コロナウイルス感染症が拡大していきました。その影響はさまざまな方面に及んでいます。先の見えない状況の中、全国各地で予定されていた平和に関する式典やさまざまな取り組みも、中止や規模縮小が決定されています。こうした事態はだれも予期しなかったことです。しかし、平和への歩みは立ち止まることなく進めなければなりません。総合研究所としては、これまで何年も亘って調査・研究を続けてきた沖縄の方々の今の思いを聞くことで、平和への願いをつないでいきたいと思います。

## 1、6月23日

### 75年前

1945年3月下旬、激しい艦砲射撃の末、アメリカ軍が沖縄に上陸。民間人を巻き込んだ地上戦が始まりました。そして6月23日、日本軍の組織的な戦闘が

終結。約3か月に及ぶ「沖縄戦」では、実に住民の4人に1人が命を落としたといわれます。

「なぜ、戦わなければならなかったのか」

「なぜ、あのとき命を落とさなければならなかったのか」

自分の意志とは関係なく亡くなっていたかたの方々。大切な方を失わなければならなかった方々。沖縄戦の体験者やご遺族は、さまざまな思いを抱えて生きてこられました。凄惨な争いの爪痕が、そして多くの悲しみの記憶が、沖縄の地には刻まれています。沖縄戦は、その日で終わったわけではありません。映画『ドキュメンタリー沖縄戦』の製作を通して書籍や授業で学んできた沖縄戦とは全く異なり、一人ひとりの沖縄戦があったこと、そしてそれは今も続いていることを痛感いたしました。

## 2020年

沖縄では、6月23日を「沖縄慰霊の日」とし、各地で式典や関連行事などが行われています。糸満市摩文仁は沖縄戦最後の激戦地といわれます。摩文仁の「平和祈念公園」では、沖縄県などの主催により「沖縄全戦没者追悼式」が開かれま

す。沖縄戦の全戦没者約20万人の名前が「平和の礎」に刻まれたこの地で行われてきた追悼式。県民の方々にとつて、亡くなったいかれた方に思いを寄せ、全世界に平和への願いを発信する大切な場です。私たちとしても、悲しみと涙の記憶を知り、戦争とは何なのかを問い、平和とは何かを考え、未来の人々につなげていくための重要な場です。

5月、沖縄県より、追悼式の規模縮小の発表がありました。新型コロナウイルスの健康・安全面を考慮した結果、従来とは大きく異なる方法で行われました。例年5000人を超える多くの方が参列していましたが、今年の参列者は161人でした。戦後75年の「沖縄全戦没者追悼式」には、被爆地である広島・長崎の両市長が招待され、ともに平和への願いを発信する場となることが予定されていました。しかし、それも叶わず、

当日は両市長の動画メッセージが発信されるにとどまりました。

新型コロナウイルスの感染拡大がもたらした「規模縮小」は、単に今年だけの非常措置ではあるでしょう。しかし、戦後75年を経過して、戦争体験者が年々減少し、ご遺族の高齢化も進んでいる現状を見つめ直したとき、「戦争の記憶をいかに受け継ぎ、未来の人々にどう繋いでいくのか」。このことを考え直すべき分岐点に来ていると感じます。



沖縄県糸満市摩文仁「平和祈念公園」の「平和の礎」写真右側の方は、今回電話取材をさせていただいた上原美智子さん（2018年3月撮影）

「戦後生まれ」「戦争を知らない世代」の人たちのために、深い悲しみに向き合いつながり、沖繩戦を語り継いでくれた方々が多くいらつしやいます。戦争の記憶を、そして戦争の体験や記憶を遺さ

## 2、今年の夏の意味すること

集まることも難しい。そのような状況でも、できることはないか。私たちは、平和を希求する念仏者として、戦争に向き合ってきた沖繩の方々今の声を聞くことが大切であると考え、電話取材の形式で、関係者にお話を伺うことにしました。

電話取材は7月上旬に行いました。なお、写真は以前撮影したものを掲載させていただきますました。

### 75年前、そして今

上原美智子さんは、沖繩県平和祈念資料館友の会・副会長をされています。戦

なければならぬという平和への強い思いを、次に伝えていくために何ができるのか。このことを考えることこそが、私たちに課せられた役割ではないでしょうか。

争体験者の一人として、小学校3年生の時の「あまんそうがま」での体験を語る、「語り部」として活動されています。学校や修学旅行などで子どもたちにご自身の経験を語り、「二度と戦争は起きてはいけない」「戦争にならないためにどうすればいいか」と訴え続けられています。

75年前、まだ小さな赤ちゃんの弟を抱え、3か月間あちこちを転々とされた時のことをお話してくださいました。食べ物もなく、服もしわくちゃで、髪の毛も洗えなかったこと。ガマに入ったら、まだ8か月の弟が泣き出し、優しくなった近所の人からも「敵に見つかるから出て行き

なさい」と罵声をあびたこと。周りに迷惑が掛からないために、弟の口を手で押さえ、ガマを出たこと。そのような中で、「自分を、そして弟のいのちを守るために、どこから爆弾が飛んでくるかわからないということがいちはん恐かった」

と言われました。知らないこと、わからないことが最も恐ろしい。そして、

「だれがいつ病気にかかるのかわからない。じつと我慢して外にも出られない。今のコロナに対する不安は、75年前のガマの中の様子と少し似かよったところがある」

と今の状況を見つめて、語られました。医療従事者への感謝と尊敬の思いはあっても、「ウイルスに感染しているかも」という疑心暗鬼で、医療従事者への差別的行為が行われているのと通底しているかもしれません。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今年は4月以降、さまざまな行事が延期・中止となりましたが、上原さん



沖縄上映会で登壇された上原美智子さん(2019年12月撮影)

は、「コロナには負けない」という気持ちで、新たな取り組みを始められています。戦後生まれの若い教員を中心に、学校としては絶対に必要だと依頼があり、「リモート」を活用するなど十分な対策を行った上で、語り部の活動をされました。この活動は、テレビでも取り上げられ(6月22日・日本テレビほか)、それを見た各地の知人から、大きな反響があつ

たそうです。

「今85歳だが、語り部はやめてはいけない。がんばらないといけないと改めて思った。100人の戦争体験者がいれば、100人違う。直接経験した人の生の声を聞いて欲しい。映画『ドキュメンタリー沖縄戦』を通して聞いて欲しい。できれば自分の体験を本土に行つて話をしたい、伝えたい」

さまざまな制限がある中で、上原さんは、「沖縄戦」の体験者である自分が伝えなければならぬという信念を胸に、今も精力的に活動されています。

2020年6月23日、上原さんは摩文仁に行かれました。式典は縮小されたものの、「平和の礎」には人が集まり、たくさんのお供えされていたそうです。

「こういう事態であっても、私たちにいのちをつないでくれた家族・先祖を大切にしていた。人間として大切にすべきことを、みんなが大事にしていた姿に、少しほっとした」

戦争のときには失われてしまった人間としての感情。新型コロナでは、先のような問題はあつたとしても、他人のいのちを大切にすることを失ってはいなかったと上原さんは語られました。現在も、新型コロナウイルスの感染者や死亡者の報道が続いていますが、「いのちを大切に。生きがいを大切に。このことを伝えたい」と仰いました。





石川八代子さん（2019年6月撮影）

### 念仏者として

沖繩別院の総代である石川八代子さんは、1944年、疎開先の熊本県八代郡のお寺で生まれ、戦後、沖繩に帰られました。沖繩の本土復帰前から長く教員として勤められた石川さんは、初めて本土へ出張したとき、ホテルに置かれていた『仏教聖典』を見て、「怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない」（ダンマバダ）という言葉に出遇ったといいます。その後、阿弥陀さまの四十八願に関心を持ち、浄土真宗の学びを深めてこられました。

石川さんは、若い世代に戦争の記憶が伝わらないことを危惧されています。

「沖繩では、小学校から高校生まで、必ず沖繩戦の劇をする。ところが、若い人の6割近くが沖繩戦のことを認識していない。いまの平和があたり前のことになってしまっている。沖繩戦で

たくさんの方が犠牲になられたが、『平和の礎』に行つたことがない人もいる。身内に犠牲者がいる方は、自分のこととして考えやすいが、そうでない人には難しい一面がある。だから、どれだけ、学校で平和の学習を行つても、『上すべり』になつてしまっている」

こうした現状だからこそ、お釈迦さまの、「怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息むことがない」との言葉を大切にしたいと仰いました。

石川さんは、2018年に中央仏教学

院通信教育部同窓会の沖繩支部を発足。2019年秋に富山の中仏通信グループ三十周年の式典に参加して以来、互いに交流を深めているそうです。互いのことを教えあい、知りあうことを通して、「沖繩に関心を持って、自分の立場で何かできないかと考えてくださる方もいる」私もまだ本土の知らないことがたくさんある」と、今年も交流を続けられています。

「浄土真宗のつながりがあるからこそ、誰とでも安心して正直に話ができる」

石川さんは毎年6月23日には沖繩別院の法要に参拝されています。その6月23日が沖繩の公休日だと知らない本土の人が多いことを、娘さんから聞かされ、「本土の方にも、せめて沖繩で大切な日であることを知ってほしい」と思ったそうです。6月23日の過ごし方はそれぞれ違いますが、その日に各地で法要が勤められ、沖繩戦の記憶をとどめ、世界の平和を願う思いが、全国に広がることにつながると、石川さんは強調されました。

## おわりに

アジア・太平洋戦争の終結から75年を迎えました。日本は、戦時・戦後の困難な時代から急速に復興し、科学技術の発展は私たちの生活に大きな恩恵を与えてきましたが、同時に、現代社会は、経済的な格差の拡大、社会的な不平等、飢餓・貧困、環境問題、原発問題など、さまざまな課題に直面しています。今も世界のどこかで争い、対立を深め、互いに憎しみあい、苦しみを抱えているのが実状です。

戦争では、沖縄戦だけではなく、かけがえのない多くの命が、突如として奪われました。8月6日には広島。8月9日には長崎。そして、各地での空襲。悲しい体験をされた方、今も痛みや悲しみ、苦しみを抱えている方が多くいらっしゃること、私たちは忘れてはなりません。

宗門では、戦後、本願寺と大谷本廟において「戦没者追悼法要」を修行するとともに、1981年から、毎年9月18日に国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、国籍、思想、信条などを超えて、すべての戦没者の方々を追悼し、悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという平和への決意を確認するため、「千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」を修行しています。また、戦後75年となる本年、全教区全寺院を対象に「宗門寺院と戦争・平和問題」調査を実施し、宗門全体として戦争の記録と記憶を留めていくための新たな取り組みを進めています。

戦争体験者が年々減少し、遺族の高齢化も進んだ今、「あの戦争とは何だったのか」「平和とは何か」「いのちとはなにか」を聞き、深く考え、その反省の上に、未来の世代につないでいくことが、私た

ちの責務ではないでしょうか。

語り継がれてきた戦争の記憶を、未来の人々にどうつないでいくのか。このことを、今一度深く考えることこそが、「平和」を希求する私たち念仏者に課せられた役割だと感じています。総合研究所としては、これからも平和に関する研究・調査を継続し、非戦平和への取り組みを続けていきたいと思えます。

〔附記〕 今回の報告にあたりまして、電話取材に応じてくださいました方々には、この場をお借りいたしました。深く謝辞を申しあげます。